

川瀬由高・稲澤努・長沼さやか・藤川美代子・呉松旆（編訳） 『王崧興『亀山島』と漢人社会研究——翻訳・論考・資料』

■出版地：東京 ■出版社：風響社 ■出版年：2024年 ■総頁数：576頁 ■定価：3,400円＋税

田村 和彦*

中国人類学の古典とされる重要著作のなかには、日本語で読むことができない名著がいくつかある。例えば、のちの宗族研究、とくにフリードマンモデルに大きな影響を与えた林耀華氏の『The Golden Wing——A Family Chronicle』（1944）や、フランシス・シュー氏の『Under the Ancestors' Shadow——Chinese Culture and Personality』（1948）はその代表といえるだろう。これらの著作はどちらも家族、親族をとりあげ、その規範と実践に着目した名著であるが、英語で刊行された作品である。しかし、今回刊訳された王崧興氏の『亀山島』は、1967年に中国語で刊行された名著であった。長らく台湾の人類学研究をリードしてきた人物の一人である黄応貴氏は、かつて王崧興氏の研究の全体像を描き出した際に、とくに『亀山島』を評して、中国人学者による最初期の台湾漢人社会に関する「科学的な民族誌であり、同時に、今に至るまで恐らくは台湾漢人社会に関するもっとも突出した民族誌の一つ、と述べている（黄 1997: 239）。この評価は衆目の一致するところであろう。

今回、この名著が中国研究の最前線にいる研究者たちによって訳出されたことは大きな慶事といえる。実際、本書が刊行される前に開催された、南山大学人類学研究所の主催によるシンポジウム「王崧興『亀山島』と漢人社会研究」（2023年12月26日）では、訳者ならではの『亀山島』に関する深い洞察と含蓄に富んだ指摘が数多く提示され、訳の完成度の高さを予見させるものだったが、本書はその期待通りの優れた著作となっている。

『亀山島』については、評者にも細やかな思い出がある。評者が中国での長期のフィールドワークに出かける前に、東アジアの人類学研究に大きな足跡を残し、数多くの研究者を育てた末成道男先生にフィールドワークの参考とすべき書籍を尋ねたことがある。その際に、先生は2冊の著作を挙げられた。そのうちの1冊がここに訳出された『亀山島』であり、その理由は聞きそびれてしまったが、観察眼の鋭さとともに、着実な親族調査のデータに基づく議論の重要性を学ぶよう教えられた、と考えている。評者が中国の農村から労働現場や都市部の公園などに研究場所を広げたのちに、常にデータについての不安感が伴うのは、おそらく、農村での長期住み込み調査に比べて、親族関係に基づく確実な理解の基底がないという感覚によるのであろう。その点で、王崧興による『亀山島』は、緻密な親族関係と社会関係に基づく機能主義的なフィールドワークの教科書ともいえる側面をもっている。

ここにとりあげる『王崧興『亀山島』と漢人社会研究——翻訳・論考・資料』は、その書名が示すように、単に名著『亀山島』の日本語への翻訳にとどまらない。この点が本書の大きな特色と魅力になっており、この特色は特殊な構成によくあらわれているため、以下では、本書の構成を踏まえて順を追ってその全体像を紹介してゆくこととする。

本書はまず、特別寄稿である、陳其南氏「王崧興氏と彼の台湾人類学の時代」論考から始まる。この、単に人物紹介にとどまらない内容の充実した論考によって、王崧興氏の人類学研究の全体像が年代を追って描かれることで、本書の中心である『亀山島』が研究史

* 愛知大学

的に位置づけられるとともに、台湾における漢人研究の歴史そのものを概観することができる格好の導入となっている。丁寧な訳注が施されていることで台湾の事情に詳しくない者でも理解を深めることができる点も大変ありがたい。

第1部〈翻訳篇〉として『亀山島』の日本語訳が配置されている。これが本書の中心となるわけだが、内容そのものは本書に譲るとして、今回の訳本の特徴として指摘すべきは、特別寄稿と同じく、こちらにも詳細な訳注が施されていることと、原著の巻末に掲載されている系譜図に実際の家番号の早見表を加えるなどの日本語版独自の工夫がみられることである。実際に原著を精読したことのある人々には共通の認識ではないかと思われるのだが、原著の中国語は決して難解ではないが、読みやすい民族誌でもない。その理由は、主に3つの点にある。

1つ目は、原著の前半で詳述される漁撈技術と経営の説明である。この作品はそもそも漁村のエスノグラフィであり、結論部の考察は文化の両極性に着目する。ここでいう文化の両極性の一つの極とは、技術を絶えず革新し、個人の利益を追求する、合理性と公平性を旨とする漁撈に即した個人主義的指向性である。このため、漁撈という生業の詳細な記述は不可欠であるが、漁業や漁村に十分な知識がない者にとっては容易に理解し得えない箇所である。2つ目は、本文中に現れる閩南語と固有名詞である。これも自身で読み進めるうえで理解に不安を覚える要素であった。3つ目は、本文中の人物が、性別を表すアルファベットに加えて、4桁の数字、すなわち2桁の家番号と同じく2桁の年齢によって表記されるためである。家番号は所属集団の確認に、年齢は漁船の船隊に関して重要な意味をもつことから、人物の属性に関するこの情報は行論に必要な情報となっている。この本文中のアルファベットと4桁の数字を巻末の系譜図と照らし合わせることで、読者は作中の人物を特定することが可能になっている。これは、プライバシーに配慮しつつ読者に開かれた、工夫された記述方式ではあるが、一読して容易に関係性が掴めるわけではない。少なくとも、評者はこの点にとくに難儀した。

この、『亀山島』原著のもつある種の難しさに対して、このたびの日本語訳は、漁撈や船上生活に関する専門家、閩南語や固有名詞の同定が可能な研究者、中国の親族関係に詳しい研究者がチームとして翻訳にあたることで、門外漢であっても原著の魅力に接するための

ハードルを大きく下げたものとなっている。おそらく、一人の研究者が単独で臨むとすれば、本書のような『亀山島』の精緻な翻訳は困難であったと思われる。「あとがき」にあるように、実際の翻訳にあたってはより多くの人々の協力があり、訳者たちの広範なネットワークがあってこそこの本書といえるだろう。また、亀山島自体はその後軍事演習場として接収され、すでに再調査はできない状況になっているのだが、当時の島民の移住先でのインタビューなど、原著テキストの読解だけでは到底迫ることができないレベルにまで本書の内容は深化されている。その意味で、今回の『亀山島』の訳本の刊行は、適切な訳者を得ることで初めて可能となった得難い事業といってよい。

原著の『亀山島』自体は、「導言」から付録の系譜まで154頁、目次や図版、奥付を含んでも169頁の著作である。一方で今回刊行された日本語版は全体で576頁にわたる大著となっている。それは、本書の特徴となっている、訳者たちを中心とした論考（「第2部〈論考篇〉」）と、王氏の重要論文の再録（「第3部〈資料篇〉」）が配置されているためである。

「第2部〈論考篇〉」は第1章の「『亀山島』を読む」と題された座談会の記録と、第2章から第8章までの論考に分かれており、『亀山島』の訳者の諸論考に加えて、日本における中国の宗族、親族研究を牽引してきた瀬川昌久氏、台湾の漁民生活研究の専門家である西村一之氏の論考を収録することで、『亀山島』がより立体的に捉えられる工夫がなされている。訳者たちの論考では、「王崧興先生——の人と学問」、「台湾の漁民社会へのまなざし」、「台湾の人類学と「自文化」研究——『亀山島』の今日的意義」、「描かれなかった事柄とは、何を語るのか——フィールドとしての亀山島、女性の仕事、島の外に広がる世界」、「亀山島系譜図を読み解く」、「亀山島から考える「漢人らしさ」研究」、「非集団論へのアブダクション——『亀山島』から「関係あり、組織なし——」への理論的展開」と、表題からも想像できるように、『亀山島』の啓発から導き出された重要な諸問題がとり上げられている。これらの論考は単体でも十分に読みごたえがあるが、それぞれの論考を往復し、また『亀山島』本文との連環のなかで読むことができることが貴重であり、画期的でもある。この仕組みだけでもすでに新機軸を打ち出していると考えるが、本書ではさらに第3部に「資料篇」として、王氏の重要な論考、すなわち『亀山島』の事例を敷衍して漢人の家族、社会を論じた論文であ

る「漢人の家族と社会」の再録と、「中国の社会システムの動態——集团的連帯なきネットワーク構築」の翻訳が掲載されている。どちらも、近年改めて注目されている「関係あり、組織なし」、「集团的連帯なきネットワーク構築」の在り方に言及したものであり、原著の翻訳と並置して掲載されることにより、今後、より多くの議論を促す作用を期待できる。

そして最後に附録として、王氏の著作目録が掲載されることで、本書は日本語で読むことのできる王崧興研究の完全版ともいべき著作となっている。

その意味で本書は、王氏の没後にその問題意識を発展させ、受け継いだ論文集である『中原と周辺——人類学的フィールドワークからの視点』（末成（編）1999）とは異なる形で学問的継承といえるだろう。本書の出版が王氏の没後30年近くの歳月を経て、直接その聲咳に接したことのない世代を中心に成し遂げられたことは、『亀山島』のもつ考察の深度とその射程の広がりとを示している。

以上、本書は、『亀山島』の翻訳にとどまらず、研究史上の位置づけと意義、その啓発から導かれる問題群の今日的考察、そして王氏の研究の全体像を明らかにする様々な側面をもつ、極めて画期的な著作である。その意義を確認したうえで、気になった点を2点ほど述べてみたい。1点は本書の構成について、もう1点は今後の展望について、である。

まず、本書の構成に関する事柄として論考の配置をあげてみたい。第2部第2章に配置されている瀬川論文は、むしろ特別寄稿の陳論文の後ろに配置し、対を成す形としたほうがよいように思われる。少なくとも一読者としては、その内容は第1部に相応しいように思われた。もっとも、これは文章の長短、全体のバランスなど編集者の難しい判断があったのかもしれない。同じく構成については、座談会記録の配置についても気にかかった。第2部第1章の座談会は、本書の中心部を成す『亀山島』翻訳の苦労と新たな発見、今日につながる示唆的な視点をどのように汲みとっていったのかがわかる貴重な記録となっている。その意味で、この記録が収録されることは重要である。また、座談会の記録は、第2部後半のそれぞれの論考につながる橋渡しの役割もあり、問題意識が論考へと結晶化する過程を示す、臨場感を覚える重要な箇所でもある。その一方で、第1部のエスノグラフィーの凝縮度の高い文章と、第2部の充実した論考篇との間に座談会の記録が配置されたことで、本文を最初から順当に

読み進めるにあたっては、このパートに温度差を感じたことも事実である。これらのことは、編者たちの意図と評者の読解のずれであろうし、もちろん論考そのものにかかわるものではなく、決して本書の意義を損なうものではない。

次に、含蓄ある本書から得た刺激のなかから一つの展望についても述べてみたい。

第2部に収められた論文はいずれも、『亀山島』と格闘した訳者らであればこそその深い読みに支えられた論考であり、すでに『亀山島』を含め王氏の研究を読み継いできた人々にも、改めて刺激的内容をもつものであることは間違いない。他方で、本書収録の論考で焦点化されなかった方向性であり、機能主義的手法を徹底した『亀山島』以降の王氏の研究をなぞるうえで、重要な問題系として歴史をめぐる思考がある。当該地域の歴史をどのように扱うかについては、王氏が重要な役割を果たした濁水溪の地域社会調査プロジェクト以降、調査地の文献資料が豊富であったことも理由であろうが、「周辺」から「中央」を考える視野とともに、王氏の研究のなかで重要な位置を占めてゆく。『亀山島』は、鋭い考察眼をもつ調査者がおこなうフィールドワークという技法の力強さを示す好例である。同時に評者には、その後の王氏の研究の展開が、共時的な機能主義的フィールドワークのみで到達し得ない社会への理解のあり方をも視野に含めた方向に進んだように思われるのである。また、1967年に刊行された『亀山島』は、50年以上の時間を経て、現在の読者にはすでに貴重な文字資料として歴史の一部ともなっている。よって、現地調査における文字資料の位置づけ、歴史および歴史意識との接合の在り方をここで展望することの外的外れではあるまい。

翻って、王氏が研究、教育で活躍した場所の一つである日本においては、東洋史の研究者たちがしばしば高密度の現地調査をおこない、華北、華中、華南それぞれの地域で優れた成果を蓄積してきた。そのなかには、三谷孝編『中国農村変革と家族・村落・国家』（三谷（編）1999）や、『亀山島』が扱った漁撈、漁民を視野に含んだ研究についていえば、佐藤仁史、太田出らによる一連の太湖流域社会の研究など、膨大な口述記録を含む傑出した研究群がある（佐藤・太田・稲田・呉（編）2008；佐藤・太田・長沼（編）2018）。中国の地域社会を考えるうえで、これらの研究が論考としてのみならず資料としても人類学者にとって大いに参考になることはいうまでもない。こうした恵まれた

研究状況のなかで、歴史学者と人類学者は、現地調査で協働するだけでなく、それぞれの異なる「歴史」に関する研究が可能なのか、という問いを設定してみることもできる。東アジアを対象とする人類学研究が文字資料と切り離せない以上、また王氏の研究を発展的に継承する意味でも、これは重要な問いになるのではないだろうか。本書は人類学者を中心に編まれた著作であるが、本書の刊行を契機に漢族の社会組織や親族、地域研究について他分野の研究者との議論が進む可能性を秘めている。この点についての今後の展開にも興味が尽きない。

いずれにせよ、日本における中国の人類学的研究の特徴の一つは、世界的には低調となって久しい家族、宗族という対象を継続的にかつ丹念に考察し、深化させてきたことにある。本書の座談会にも参加している瀬川昌久氏によって刊行された、族譜に表現された人のつながりと規範意識を析出した『連続性への希求』（瀬川 2021）は、まさにその到達点を示すものである。他方で、豊富な系譜図を掲載する『亀山島』が明らかにした、父系と分配の原理という意味では根底ではつながっているが別のベクトルと評者には思われるところの人の関係の在り方についても、『亀山島』本文の訳出と刺激的な論文群を含む本書の刊行によって今後

さらに深化してゆくことになろう。その意味でも、本書が日本における中国社会の人類学的考察のなかで、絶えず立ち返って参照される大きな一里塚を築いたことは間違いない。

参考文献

黄 応貴

1997 「王崧興先生の学術研究」『從周辺看漢人的社会與文化——王崧興先生紀念論文集』黄応貴、葉春榮（主編）、pp. 235–258、中央研究院民族学研究所。

佐藤 仁史、太田 出、稲田 清一、呉 滔（編）

2008 『中国農村の信仰と生活——太湖流域社会史口述記録集』汲古書院。

佐藤 仁史、太田 出、長沼 さやか（編）

2018 『中国江南の漁民と水辺の暮らし——太湖流域社会史口述記録集 3』汲古書院。

末成 道男（編）

1999 『中原と周辺——人類学的フィールドワークからの視点』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、風響社。

瀬川 昌久

2021 『連続性への希求——族譜を通じてみた「家族」の歴史人類学』風響社。

三谷 孝（編）

1999 『中国農村変革と家族・村落・国家——華北農村調査の記録』汲古書院。